別紙４

報告番号	※　　第　　号

主　論　文　の　要　旨

論文題目	木村敏の＜主語的＞＜述語的＞概念による心理療法 －統合失調症スペクトラム障害と自閉スペクトラム症を対象に－
氏　　名	白井　聖子

論　文　内　容　の　要　旨

木村敏（1931－2021）は現象学的精神病理学の第一人者であり、1960 年代から主に統合失調症の臨床を通して「自己論」などの思索を展開してきた。木村の初期の論文には、重要な精神病理学テーマが網羅されている。特に「離人症の現象学」（1963）と「精神分裂病症状の背後にあるもの」（1965）は、木村の発想の原点となると言えるだろう。

本論文においては、木村の現象学的精神病理学の視点と統合失調症の精神療法における「治療観」が重要な鍵となる。自明とされている「自分」が感じられずに苦しんでいる離人症の治療を通して、統合失調症に同様の苦悩を見出し、「自分」や「自己」が木村の現象学的精神病理学のテーマになったのだと考える。そして、木村は独自の自己論（「主語的」「述語的」概念）を展開し、2008 年に「主語的な自己」「述語的な自己」の「自己」の二重性を見出した。

さて、木村（十一ら,2004）は、統合失調症スペクトラム障害（以下、統合失調症と略記）と自閉スペクトラム症（以下、ASD と略記）に対して、「自己というものの成立の問題」が共通の課題であることを指摘した。

本論文では、この木村の自己論における「主語的」「述語的」概念を援用し、統合失調症ならびに ASD の「自己の成立」を理解し、その理解に基づいた統合失調症と ASD の心理療法を論じようとするものである。

第 1 章では、木村の自己論における「主語的」「述語的」概念の変遷についての文献展望と木村の「治療観」に関する文献展望を行った。第一期（1960 年代～1970 年代初期）「主語的」「述語的」概念の登場、第二期（1970 年代中期～後期）「主語的」「述語的」概念と「あいだ」概念の模索、第三期（1980 年代前後～2007 年）「主語的」「述語的」概念における「動的構造」の展開、第四期（2008 年以降）自己論における「主語的な自己」「述語的な自己」概念の完成、として木村の思索の変遷を示した。以上の様に、第四期で「自己」を「主語的な自己」「述語的な自己」と捉え、第三期で本格的に展開した

「あいだ」概念を「水平の『あいだ』」「垂直の『あいだ』」と捉え、「自己」と「あいだ」の多重性構造を述べている。そして、自己と他者との「水平の『あいだ』」が成り立つことによって、個々の内部の「垂直の『あいだ』」である「主語的な自己」が「述語的な自己」に裏づけられ「自己」が成り立つとしている。この「述語的な自己」とは、「自分のなかにあるなまなましく生き生きした何か」を指しており、「活動中の動きのある自己」である。一方、「主語的な自己」とは、「文章の『主語』（名詞や代名詞：筆者註）として出てくるような『私』」であり、「固定的な同一性」を示す特性があると述べている。この「自己」における「主語的な自己」「述語的な自己」は、単体で成立するものではなく、互いに他方の成立の根拠となっている関係である。つまり、身体を通じて自分の中に生じてくる漠然とした動き（「述語的な自己」）を、ある気持ちや感覚として「形」に納めること（「主語的な自己」）によって、さらなる動きを伴う「述語的な自己」が産出される。そして、次の「主語的な自己」によって形づけられていくのである。この相互促進的で円環的な関係を、木村は「動的構造」と呼び、更新し続けることが「自己」であると述べた。そして、「主体としての自己が主体としての他者と出会う」（1983b）ことによって「自己の自己性」が成り立つという統合失調症の「治療観」を示した。

第 2 章では、本論文における問題と目的を示した。第 1 に、木村の自己論における「主語的」「述語的」概念を援用し、統合失調症と ASD の「自己の成立」を理解すること、そして第 2 に、第 1 で得られた統合失調症と ASD の理解を基に心理療法を検討していくことを目的とした。

本論文で述べる心理療法は、セラピスト（以下、Th と略記）とクライエント（以下、Cl と略記）が自己の成立に向けて取り組むことになるものである。「主語的な自己」「述語的な自己」を目指した心理療法について、Th と Cl とのあいだで取り組む途上を表す言葉が必要になると考え、その過程を表すために、主語的部分、述語的部分と連動という用語を用いることとした。そして、Th の関わりを通して Th と Cl とのあいだで述語的部分と主語的部分の連動（水平の連動）が生じていき、それによって統合失調症と ASD それぞれの内部に主語的部分と述語的部分が連動（垂直の連動）し、「自己」が成立していくと考え、事例を通して検討していくこととした。

第 3 章では、ASD の二つの事例を提示し、ASD の「自己の成立」を主語的部分、述語的部分と連動で理解し、その理解に基づいて ASD の心理療法について論じた。第 1 節の ASD の思春期女子の心理療法では、Cl の反応はほとんどなく、Cl 独自の間や沈黙、時には泣き出すなどの状態を示した。一方で面接を続けていくと、少しずつ自分が話したいことを唐突に語り出した。このような特徴から、自分の独特な考えや脈絡は成立していると捉えられ、Cl は内部完結した述語的部分と主語的部分の連動が成り立っている状態であると Th は考えた。Cl の突然の沈黙や急に泣き出

すなどの状態については、述語的部分と主語的部分の連動が滞り、述語的部分に埋没した状態であると Th は理解した。第 2 節の自閉症のプレイセラピーでは、最初から Cl の遊びは固定化されており、Th と Cl との関わりをもつことが難しかった。Cl は発話がなく、遊びの内容は水遊びや影を見るなど、直接モノを見る、触るなどの感覚を用いる遊びであった。つまり、感覚遊びによって生じる述語的部分と主語的部分の連動は閉じられたままであり、Cl は内部完結した述語的部分と主語的部分の連動の状態と理解した。

以上で示した二つの事例では、Cl が体験している述語的部分を Th が共有していくことを行った。そして、Cl と Th とのあいだで水平の連動が生じていき、個々の内部に垂直の連動が生じ、「自己」が成立していくことを目指した。そのためには、Th 自身の述語的部分と主語的部分の連動を活用していくこと、つまり「自家発電的」（白井 2012）に関わるためのエネルギーを維持し続けることが重要であることを示し、その取り組みについて考察した。

第 4 章では、統合失調症の三つの事例を提示し、統合失調症の「自己の成立」を主語的部分、述語的部分と連動で理解し、その理解に基づいて統合失調症の心理療法について論じた。第 1 節の統合失調症の心理療法では、身体的な訴えを繰り返す Cl と Th との対話は成り立たなかった。Cl は自分の訴えを繰り返すという内部完結した述語的部分と主語的部分の連動の状態であった。それは、Cl の脆弱な自己を守るための意味があると理解した。一方で、食事や天気などの日常の話では、Th とのやりとりは可能であった。定型的な日常の話であれば Cl と Th との水平の連動は成り立つと捉え、関わりをもつための「とりかかり点」（中井 1976）として Th は活用できることを述べた。第 2 節の妄想性障害 1 の心理療法では、Cl は一方的に関係妄想を訴えた。Th はその関係妄想を Cl の内部完結した述語的部分と主語的部分の連動として捉えた。一方で、Cl の日常生活は比較的維持されており、面接経過中も調子を大きく崩すことはなかった。「妄想」的な自己のあり様と現実的な自己認識の面との両方を自己のあり方として Th は理解した。そして、この両面の微妙な均衡を保つことによって、Cl の自己の脆弱さを守る役割があることを述べた。第 3 節の妄想性障害 2 の心理療法では、一時精神状態を呈した Cl が、「自分」という感覚に確かな手応えを得るために、Th に対して語っていった。しかし、この Cl の述語的部分と主語的部分の連動は内部完結した状態であり、その自己のままでは現実を逸脱した状態を呈した。そのため、Cl の内部完結した述語的部分と主語的部分の連動を Th は尊重しつつ、現実感との折り合いをつけていくことが Cl の目指す「自己」のあり様であることを述べた。

以上に示した三つの事例については、Cl の内部完結した述語的部分と主語的部分の連動に Th がどれだけ理解し、共有することができるか、そこが治療関係を成立たせるために必要であることを示した。そのためには、Cl とのあいだで生じてくる

Th の述語的部分と主語的部分の連動に意識を向け続けることが重要であった。そして、Th の述語的部分が一旦 Cl の述語的部分と一体となることが生じていき、Cl と Th は述語的部分を共有することによって、別個の自己が生成されていくことを述べた。その取り組みについては、それぞれの事例に則して示した。

第 5 章では、これまでの内容を総括し考察を行った。統合失調症と ASD の「自己の成立」の理解については、共に内部完結した述語的部分と主語的部分の連動の状態であること、つまり内部完結した垂直の連動が成り立っていることが示された。しかし、その背景は異なることを指摘した。統合失調症の場合は発症時に危機的な状態に陥った脆弱な自己を守るためであること、ASD の場合は他者との「共有体験」（滝川 2017）が乏しいため、独自の対処法となり、内部完結した垂直の連動が生じることになったと考える。そして、統合失調症と ASD 共に、他者と共有する水平の連動が成り立っていないことが示された。

次に、この「自己の成立」を目指した統合失調症と ASD の心理療法については、治療関係を成り立たせるために、Th の能動的な働きかけが必要になることを述べた。つまり、Th 側の述語的部分と主語的部分の連動を活用していくことであった。例えば Cl の姿勢や表情、雰囲気や声のトーンなど五感を使って感じ取り、自然に湧いてくる Th の述語的部分と主語的部分の連動を用いて Cl の状態をイメージしていくことであった。そのイメージがさらに Th の述語的部分を引き出し、連動は更新されていくのであった。その能動的な Th の「動き」を言葉で伝えたり、声や動作で示していくことによって、滞ってしまっている Cl 側の自己の状態や Cl と Th との関係に、新たな「動き」を生じさせるのである。このような Cl への関わりを繰り返していくうちに、Cl の述語的部分と Th の述語的部分が共有されるという体験が生ずる過程が生成する。すなわち、このような互いの述語的部分の重なり体験を通して、Th と Cl のそれぞれに新たな垂直の連動が生じていった。これは一回限りのことではなく、何度も面接を通して繰り返されていくことが必要であることを述べた。

以上のように、本論文では「自己の成立」を目指した「主語的」「述語的」概念による統合失調症と ASD の心理療法モデルにおいて、筆者は Th の述語的部分と主語的部分の連動が生じていることこそが、「主体としての他者」（木村 1983b）であり続けることを考察し、統合失調症と ASD の「自己の成立」に取り組む心理療法においては、「主体としての他者」としての Th の存在が重要であることを述べた。

本論文の意義としては、木村によって示唆された統合失調症と ASD の共通の問題である「自己の成立」を目指す心理療法を提示したことである。今後の課題としては、さらに年齢層や状態像の幅を広げて検討し議論を重ねていくことである。そして、今後の展望は、他の病態等への適用を検討していくことであると考える。